

博士学位論文審査要旨

2013年1月25日

論文題目： 20世紀初頭のイギリスのインド統治
——ミントー、キッチナーと統治改革——

学位申請者： 和田 応樹

審査委員：

主査： 経済学研究科 教授 布留川 正博

副査： 経済学研究科 教授 川越 修

副査： 経済学研究科 教授 小野塚 佳光

要 旨：

本論文は、20世紀初頭のインド総督ミントーの統治期（1905－10年）におけるインドの統治改革および軍制改革の内容、その歴史的意義について明らかにしたものである。

第1章では、インド総督の地位にあったミントーならびにインド軍総司令官の地位にあったキッチナーに関する先行研究および経歴をまとめている。また、イギリス植民地帝国の貴族と軍人についてその役割を論じている。

第2章では、インド統治機構の歴史的変遷をまとめるとともに、インド政庁のなかで中心的位置を占める総督行政参事会の重要性が指摘されている。また、イギリス本国政府とインド政庁との関係についても言及されている。

第3章では、キッチナーによるインド軍の軍制改革の歴史的経緯が明らかにされている。インド軍は国内の治安維持のためだけに存在するのではなく、イギリス帝国防衛の役割をも担うことになった。第一次世界大戦ではキッチナーの指導のもとインド軍がヨーロッパ戦線に投入されたことが指摘されている。また、この軍制改革がインド統治とその統治機構との関係のなかで捉えられている。

第4章では、インド統治機構のなかで「もっとも聖なる場所」であった総督行政参事会の改革の経緯とその意義について明らかにされている。すなわち、インド人が総督行政参事会に登用されることにはインド政庁内部でも強い反対があったが、ミントーが自らの権限でもって抵抗を押し切ったことが明らかにされている。

古典的帝国主義の時代におけるインドの統治機構改革および軍制改革についてはこれまで研究蓄積がほとんどなく、これを *The Indian Papers of the 4th Earl of Minto* を使用して明らかにしたことは重要な研究成果であるといえる。ただし、インド関連の一次史料は他にもあり、これらを解読して総合的な研究に発展させることが今後の課題となる。

以上により、本論文は、博士（経済学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2013年1月25日

論文題目： 20世紀初頭のイギリスのインド統治
——ミントー、キッチナーと統治改革——

学位申請者： 和田 応樹

審査委員：

主査： 経済学研究科 教授 布留川 正博

副査： 経済学研究科 教授 川越 修

副査： 経済学研究科 教授 小野塚 佳光

要 旨：

本論文提出者は、2013年1月16日午後5時から約1時間30分にわたって行われた試問会において、提出された論文に関する研究の概要、その意義と学術的貢献について説得力ある説明を行うとともに、審査委員との質疑・討論を通じて当該分野に関する高い学識と幅広い研究能力を有していることを証明した。

また、外国語能力に関して、英語について十分な学力を有していることが認められた。

よって、総合試験は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 20世紀初頭のイギリスのインド統治——ミントー、キッチナーと統治改革——

氏名： 和田 応樹

要旨：

1757年のプラッシーの戦いで、その第一歩が記されたイギリスのインド統治 (British Raj) は、1947年のインド・パキスタン分離独立まで続いた。インドにおける植民地化から脱植民地化までの歴史的プロセスは約2世紀にわたった。

戦前期の日本の植民政策学者矢内原忠雄が言う「人類社会に於ける圧迫の中最も主要なるものの1つは一国民若くは一民族による他国民他民族の支配である」ところの植民地統治が、なぜこのように長く続いたのか。

インド統治の長い期間とその歴史的影響を考えれば、その統治が植民地的収奪によりインドを貧困の状態に陥れたという議論に終わるのではなく、イギリスのインド統治が長く続いた要因が何であって、統治の安定化のためにいかに対応したのかが問われなければならない。

よって、本論は、上記の課題認識に基づき、イギリスのインド統治史研究として、植民地国家インドの統治において、どのような統治制度が構築されたのか、また、統治をとりまく社会の変動にいかに対応し、統治制度を再編したのか、統治制度の再編に統治者と被統治者の双方がどのように関わったのか、それらの問いかけを究明するものである。

そのために、本論が対象とするのは、4代ミントー伯爵 (Gilbert John Elliot-Murray-Kynynmound, 4th Earl of Minto, 1905-1910) の総督時代である。なぜなら、ミントーの総督時代には、インド統治機構とインド軍の双方にわたる改革が行われたからである。

イギリスのインド統治を支えていたのは、中央集権的な行政機構による統治と近代的な植民地軍であった。その特徴は、実質的な権力がインド総督とその総督行政参事会に集中し、英領インドの軍事力がそれを支える構造にあった。イギリス人から「最も聖なる場所」と評された総督行政参事会を中枢とする統治機構と植民地軍であるインド軍、それらを率いるインド総督とインド軍総司令官、これらの4つのキーワードが本論における分析の軸となる。

植民地化の当初から、東インド会社はインド人傭兵を使って、インドにおける領土を拡大した。その間、会社は統治機関に変貌し、インド統治の機構が順次整備されていった。

インド統治の転換点は、1857年の大反乱で、会社による間接統治から、本国政府の直接統治に変わった。けれども、大反乱の以前から、インド統治を支えていたのは、中央集権的な行政機構と近代的な植民地軍で、その統治構造は、大反乱以降も、脱植民地化まで基本的に変わることなく続いた。さらには、独立後のインドも、インド統治時代の官僚組織や軍隊機構を大きな変化もなしに継承した。

しかし、帝国主義時代の20世紀初頭、直接統治から半世紀を経て、徐々に成長していたインド人の民族意識は、インド総督カーゾンの行った1905年のベンガル分割令によって覚醒し、インドは政治的危機に見舞われた。また、1902年のインド軍総司令官就任以来、キッチナーがすすめてきた英領インドの軍制改革は、一元管理の問題を巡って、カーゾンとの対立をもたらし、一時的な停滞を余儀なくされた。

このような状況のなかで、カーゾンの遺産を継承したのがミントーである。60歳で総督になるまでに、彼は豊富な軍事経験と植民地統治経験を積んだ。第二次アフガン戦争への従軍、カナダ総督の軍事秘書官、スコットランドでの所領経営と義勇軍活動、カナダ総督が彼の主な経歴であ

る。彼の経歴は帝国の資産と当時の植民地大臣チェンバレンに評価され、その任命には、軍事知識に通じた彼によって、キッチナーとの関係を円滑にし、軍制改革を再始動させる意図が働いていた。

キッチナーもミントーと同様に、インドに赴任するまでに、軍人としてだけでなく、植民地統治に関わる経験を積んでおり、インド軍総司令官在任中は、軍事問題に限らず、統治機構の改革の問題まで積極的に関わった。ミントーやキッチナーといった、イギリス植民地帝国を現地で支えた貴族と軍人が植民地統治に果たした役割を検討することも、キーワードにかかわるもう1つの重要な課題である。

ミントーの時代には、モーレイ＝ミントー改革と称される統治機構改革が実施され、インド統治史上はじめて、総督行政参事会にインド人が登用された。また、キッチナーがすすめていた軍制改革は、インド軍総司令官の下での軍制の一元化に結実し、第一次世界大戦期のインド軍はキッチナーの創造物と言われた。このように、イギリスのインド統治を支える両軸である統治機構とインド軍の双方にわたる改革が実施され、統治制度の再編が図られた。

本論は、ミントーとキッチナーが主導した統治機構改革と軍制改革、これら2つの改革の歴史的経緯を分析することを通じて、冒頭に掲げた、課題認識に迫ることを目的とする。従来の研究では、統治機構改革と軍制改革は個別に考察が行われ、両改革の関係は検討されることが少なかったが、本論では、どちらもインド統治にかかわるものとして、一体的な視野に収めて論じる。例えば、軍制改革では、インド軍総司令官の下で軍制の一元化が図られたが、インド軍総司令官の地位は総督行政参事会のありようと深くかかわるものであった。

本論の構成は、第1章で、インド総督の地位にあつて統治改革を行ったミントー、インド軍総司令官の地位にあつて軍制改革を行ったキッチナーを取り上げる。イギリスのインド統治における新しい制度の創出をそれぞれの立場で主導した2人の人物の経歴と彼らに関わる先行研究をまとめていく。また、イギリス植民地帝国の貴族と軍人の役割について論じる。

第2章は、個別の課題として統治の基礎となる統治機構の実態を史的に解明することを目的とするとともに、統治機構改革と軍制改革を考察するにあたり、押さえておくべき歴史的経路としてのインド統治機構の流れについて述べる。ここでは、インド総督を頂点とする植民地国家インドの国制のありようと、そのなかで中枢的位置を占める総督行政参事会の重要性が指摘される。さらに、本国政府と現地インド政庁との関係にも着目し、電信部改革の事例を取り上げ、植民地国家インドの複雑な統治の実態を明らかにする。

第3章では、キッチナーによる英領インドの軍制改革を取り扱う。インド軍の歴史的役割の変遷を踏まえた上で、軍政改革の歴史的経緯を明らかにする。その際に、従来の研究では別個になされていた統治機構と軍事力を関連させることを課題として、インド軍という英領インドの軍事力をイギリスのインド統治から切り離すのではなく、軍制改革をインド統治とその統治機構との関わりの中で捉える。そのため、多岐にわたる軍制改革のなかで、インド軍総司令官の下での一元管理に主眼を置く。この問題を巡る検討からは、本国政府とインド政庁間にある帝国に対する認識の違いも浮き彫りにされる。

ミントーによる統治機構改革を扱う第4章では、インド統治史上初めて「最も聖なる場所」にインド人が登用された総督行政参事会の改革に焦点をあてる。総督ミントーが、政治的危機に対して、現地人の政治参加の点で、どのように改革を行ったのかを考察する。インド人参事会員の任命問題を巡っては、総督行政参事会の内部で大きな反対があった。本章では、改革の意義とミントーの意図を明らかにするために、最大の反対者となったキッチナーらの意見と対比させる。

考察にあたって使用する主な史料は、統治改革に関わる公文書等が収録されている『第四代ミントー伯爵のインド文書集』(The Indian papers of the 4th Earl of Minto)である。ミントーの事績を収集した文書の性格上、彼を中心とする統治者側の史料であるが、植民地統治をとりまく環境の変動に対応した統治改革を明らかにするという本論の課題に対応するために、『インド

文書集』所収の史料に基づいて考察を行っている。

『インド文書集』のほかには、議会議事録 (Hansard) や日本の外交史料館に所蔵されている印度駐在武官報告等の一次史料に加え、ミントー、キッチナーやインド軍についてこれまで蓄積されてきた研究成果＝二次史料に依拠する。

植民地統治は、矢内原忠雄によれば、植民政策の主体と客体が複雑に絡む問題であり、そこには、どのように植民地を維持すべきかという価値判断が含まれる。また、冒頭に述べたように、「人類社会に於ける圧迫の中最も主要なるものの1つ」という指摘への緊張感ある対峙が求められる。その上で、本論は、ミントーの総督時代を手掛かりに、イギリスのインド統治が統治機構と軍事力により支えられ、時代の変化に応じて再編されていったことを通じて、インド統治を一つの社会的事実として解明する試みである。